

第8章 大江町と最上川の流通・往来の景観

第1節 大江町の景観の特徴

(1) 左沢の町場景観

最上川舟運の河岸として発展した左沢では、景観を形作る諸要素が最上川と有機的に結びついて、複合的、重層的な景観が形成されている。このような現在の左沢の景観の特性は、地形と現在の土地利用から「最上川の河川区域」「山城跡を中心とした丘陵部」「市街地が形成された段丘面」の3つに大別して、それぞれの土地利用から説明することができる。

① 最上川の河川区域

置賜盆地から五百川峡谷を流れ下った最上川は、左沢でその出口に達して楯山にぶつかり、北から東に流れを変えて村山盆地に流れ出る。最上川舟運における左沢の河岸は、大型の艀舟から峡谷部をのぼる小鶴飼舟へと、川船そのものを小型に転換する中継地として重要な役割を果たした。

左沢の月布川合流点から川端、百目木付近は、左沢の生活・生業と最上川の深い関係がみられる場所である。左沢では、「米沢藩舟屋敷」北側の川端から月布川合流点付近一帯に船が着いて河岸の景観が形成されたという。当地における最上川舟運の様子について、百目木甚句や百目木茶屋唄は、舟運の歴史的な事実を盛り込むとともに、北前船が北海道から、または上方へ運んだ商品を、全国各地の地名を織り込みながら唄いあげている。

また、景勝地とされた柏瀬の眺め、陸路における左沢の玄関であった桜町渡船場跡や旧最上橋、百目木の築跡など、舟運以外にも左沢の生活が最上川と密接に関わり形成された景観が存在する。さらに史跡左沢楯山城跡内の「日本一公園」も、眼下に流れる最上川への眺望を称えてこの名前がついたと伝えられる。

このような百目木付近は、現在も川と住宅街が隔てられておらず、河川区域から住宅街までが一体となった空間が形成されている。

一方で、左沢が最上川舟運における重要な中継地点となった地形や地理的な条件を、町域上流部の五百川峡谷における自然環境にみることができる。

また、最上川舟運が上流の糠野目までつながったのは元禄年間の開削以降であるが、町域を流れる最上川にも当時の開削跡とされる地形がみられる。左沢と用の間には、難所「左巻」や、難所の目印で山頂の稲荷大明神が水上安全の神として信仰された「大明神山」がある。川と山頂で150mの比高がある岩の絶壁「明神ハゲ（用のハゲ）」も江戸時代の名所といわれ、山頂には巖島神社があり、水上交通の安全を祈る人の参詣があった。このように最上川舟運を通して成立した景観や、認知された景観も存在する。

② 山城跡を中心とした丘陵部

稲沢山丘陵の左沢楯山城は、14世紀に大江氏の一族左沢元時により築城されたとされる山城で、平成21年2月国の史跡指定を受けている。城跡の内部では、曲輪や切岸など城跡の地形をみることができ、発掘調査では掘立柱建物跡や15世紀後半から17世紀の碗や皿が出土している。山城跡の最頂点は標高約222mで、最上川とは約120m、市街地とは約110mの比高差がある。城跡の南側は、尾根上から最上川へと急な角度

で落ち込む斜面が形成されている。

城跡は、明治以降近隣住民に払い下げられ、桑畑や後には果樹栽培などに利用されたが、現在は大部分が大江町有地として管理されている。

城跡内部には暖温帯性の樹林が分布している。城の中核部があったと考えられる「八幡座」付近では、夏緑広葉樹二次林で、コナラ～カスミザクラ、クヌギの群落が分布し、かつて薪炭などに利用するため定期的な伐採で存続されてきた植生の名残がみられる。人工的なスギやキリの植栽林も分布している。

最上川に面した城跡の南部には、最上川ビューポイントの一つである「日本一公園」（楯山公園）がある。「日本一公園」という呼び名は、昭和7年の天神越街道改修工事のとき、左沢の工事関係者が現在の公園から最上川を眺める眺望を「日本一」と称えたことからついたといわれる。昭和34年の合併によって成立した大江町の町名の由来である、最上川の「大江」たる様子もここから最もよく眺めることができる。

公園から愛宕山にかけては、里近くの高い場所に祀られた虚空蔵の信仰と関わる行事「高い山」が、大正7、8年頃から行なわれ、旧暦4月17日には、左沢町民により幾組も宴席が設けられて賑わっていたという。

このように稲沢山丘陵に位置する左沢山城跡は、城の地形や遺構が残る場所であるが、山城や「日本一公園」「ビューポイント」など、現在の左沢市街地や最上川との比高差、周辺の地形や地理条件を背景として意義付けがなされてきた場所でもある。山城跡としては、遺構が残る楯山と、最上川や市街地の地形的な関係が、当時の最上川を意識した城と居住地をうかがわせる。

③ 市街地が形成された段丘面

最上川と月布川の河岸段丘上には、現在左沢の市街地が形成されている。段丘面の標高は、約105 m～110 m程度、市街地の東端を流れる最上川は、川面で標高が約100 m程度である。河岸と谷口集落という物資集散地として、最上川舟運とともに暮らしが展開された町場であり、政治的拠点の城や城下町に由来する構造を持った生活・生業の空間である。

城と共に構築された居住空間の存在は、中世に遡ると考えられている。近世には小漆川の台地上に城が築かれ、城と市ノ沢川で隔てられて台地より標高が低い現在の市街地南部に城下町が建設された。町内には重要な街道筋に連なる通りが交差する。また、他藩からの攻撃にそなえるために鉤型や丁字型の道がつけられ、要所要所に社寺が配された。そして、城の続きの台地上には藩主の菩提寺（巨海院）が置かれた。

城下町では、分水界に沿って主要な通りと水路がのびて、通り沿いの短冊地割には商人や職人などの町人が暮らした。町人が居住した短冊地割では、正面から奥に向かって店、住居、蔵、畑という土地利用がみられ、通り沿いに建築が連続する街並みが形成されている。なかでも内町・横町通りは現在の中央通り商店街で商業地域であり、原町通り沿いは通りに面してミセグラが分布し、最上川舟運による繁栄を伺わせる風格ある景観が継承されている。小漆川城跡や松山藩左沢代官所付近には武家が居住した。武家が居住した地域は、町人が居住した地域に比べ間口の広い敷地で、小漆川城跡には武家屋敷をうかがわせる大型の民家も残されている。総じて、武家と町人が住み分けながら共存して形成された町の姿が継承されている。

一方、最上川と並行して延びる原町通りの延長上では、明治の舟運最盛期を迎えた頃に新しく宅地が形成され、船乗りや築漁を行った者も住んだといわれる。それ以前から、原町から桜町渡船場付近には「米沢藩屋敷」、最上川の渡船を行った家や荷物の積み下ろしを行った丁持ちなど、最上川や舟運に関わる生業に従事した者が存在していた。現在も最上川の渡船場跡や最上川へ続く道、船に代わって利用された最上橋への取り付け道路などがあり、最上川とのつながりの深い空間が形成されている。

このような構造を持つ左沢の町場では、近世、最上川舟運による経済的恩恵を受けた左沢の町人の力を背景に、町人と武家が共同で、町の規模に比して盛大な都市型祭礼を行っており、現在も受け継がれる内町組や御免町組の囃子屋台、獅子踊りなどが町を巡っていた。

そして、巨海院には左沢商人が納めた手水鉢が残っており、金刀比羅神社が祀られる山の名「象頭山」の銘から、金毘羅堂に最上川舟運の航行安全を祈ったものだとされる。同堂には明治期に左沢の舟乗りによって舟中安全を祈った「小鵜飼船押絵馬」も納められている。元屋敷の「波切不動」（大滝山不動堂）も、船乗りや遊女の信仰を集めたという。

明治末期に最上川舟運は衰退するが、大正11年、鉄道左沢線が開通した。鉄道による流通・往来は左沢と内陸の村山盆地、山形市を結びつけ、そのことによる購買圏の変化は、江戸時代から続いた左沢の定期市や商店数に影響を与えた。一方、それまで水田が広がっていた前田に駅が置かれ、駅前には旅館や劇場が作られて、新しい街並みが展開した。

これらが、それまでの街並みと結びつき、両者が共存しながら現代の市街地景観が形成されている。

（2）本郷・七軒の農山村景観

大江町の西部には、月布川とその支流沿いに集落が散在している。本郷・七軒は昭和29年10月に合併して漆川村となる以前の村の名前である。江戸時代、七軒地区は幕領、本郷地区は左沢領の一部だった。町の西端朝日山地から月布川が流れ出て、左沢で最上川に合流するが、本郷・七軒の農山村部の大部分が、月布川またはその支流域に含まれている。

大江町内の本郷・七軒で見られる農山村部の景観は、東から、月布川下流で谷底平野に開けた農村、月布川の河谷段丘上に展開する農村、月布川の支流に散在する山村の大きく3つに分類することができる。月布川下流では、北堰などの水路整備とともに稲作が盛んにおこなわれ、中・上流の丘陵部と河岸段丘上では、樹木栽培や焼き畑農業により商品作物が栽培された。

商品作物の栽培は、江戸時代の中期以降盛んに行なわれるようになった。大江町の農山村では焼き畑で青苧がつくられた。嘉永6年、月布の大泉家から左沢代官所に提出された文書には「産物第一之青苧」という表現をみることができる。大江町や朝日町、置賜の山間部は「最上苧」として知られる青苧の産地で、今の柳川（旧青柳村七夕畑）の「七夕苧」が最高の品質で有名だったという。

「月山の見えるところには紅花を、見えないところには青苧を植えよ」という言葉が村山地方に伝わるが、青苧は平地の少ない山間部の村々で栽培され、山際に傾斜する土地が耕地に利用されていた。そして、風の勢いが比較的弱く土壌が肥えた場所が青苧栽培の好条件であり、大江町の山間の農村一帯は、青苧にとって良好な自然環境を有していたといえる。

さらに、青苧のほかに木蠟、漆、生糸などが大江町の農山村の特産物で、水田率が低くとも、このような商品作物栽培で生計を立てていた集落も存在した。

農山村で生産された青苧は、左沢の河岸から、または大石田から最上川を川船で運ばれ、奈良や京都、近江や越後などに出荷された。例えば七軒地区の十郎畑の斎藤半助家は、青苧の集荷問屋として左沢の内町と御免町に加賀屋（表加賀屋・裏加賀屋）という青苧の集荷問屋を開いて青苧を移出し、多大な収益を上げていた。

また、大江町の七軒・本郷の集落は左沢と「湯殿山往来」または「左沢市場道」と呼ばれた大井沢街道で結びつき、谷口集落左沢の後背地として商品作物を左沢に輸送していた。この東西の道に加え、南北の「道智道」や、大沼浮島から小清、貫見を経て入間・本道寺につながる道があり、出羽三山の往還に利用されていた。

これらの遠隔地との流通・往来は、左沢だけではなく、農山村部にも富や文化をもたらしている。最上川舟運を通じて北陸や上方と取引を行っていた葛沢の阿部家では、舟運時代に京都から持ってきたと伝えられるシダレザクラが庭に咲き、葛沢集落の二渡稲荷神社は山城国の神社を勧進したものと伝わる。さらに集落の地蔵講では阿部家に集った集落の人々が金春流の謡曲を歌いあげており、阿部家にとどまらない集落の文化は、最上川舟運や三山往来等広域における交流があって成立したものとみることができる。

さらに、大江町内の本郷・七軒の社寺には「前句寄」（前句付）という連歌の掛額が、近世から明治期に奉

納された。額の唄は地元の村人によって詠まれている。このことから当時村に暮らした人々は、文芸的素養や教養を獲得し、句を詠むモチベーションやゆとりを保持していたこと、それを保障する安定的経済生活が営まれていたことが分かる。この背景にも青苧がもたらす経済的なうるおいや、それを成り立たせた広域的な流通・往来が存在していた。

このように、商品作物を産出した農山村では、年中行事やお祭りなどが行なわれ、ゆたかな文化と暮らしが成り立っていた。特に、換金作物の青苧による経済的な恩恵は、精神的・文化的な豊かさをもたらして、自立した生活と文化を創出した。今も続く行事や神社、庶民の文芸「前句寄」や青苧製の「御戸帳」といった社寺への奉納物などを通して、そのような暮らしをかいまみることができる。

月布川の河岸段丘に広がる農村では、集落の周辺に水田が広がり、背後の丘陵部は桑畑として利用され戦後に果樹園に転換された。段丘が狭小になる上流部では、水田の周辺に展開する畑地や、桑畑を転用した果樹園が主体となる。これら集落の背後の丘陵に広がる果樹園は、かつては焼畑で青苧が栽培されていたことが想定される。一方で支流に沿う山村では、現在の水田は戦後に水田化したもので、かつては青苧が栽培されていたと考えられる。

農山村の特産物の変遷をみても、明治後期の頃から青苧栽培が減少して、養蚕が盛んになって、一時は養蚕が生計の中心であったが、戦後しばらくして果樹栽培へと土地利用の変化が進んでいる。ただし青苧は戦後まで、自家用とした栽培がなされていたケースもある。

そして現代、山間部では青苧をはじめとする商品作物を含む多様な土地利用がみられたものが、森林化して単純化している様相がみられる。特に月布川上流域の豪雪地帯では、果樹への転換が不可能であった。水田単作地帯の農山村は、高度成長期にさしかかる時期には出稼ぎに行かざるを得なくなり、1970年代以降は挙家離村した景観が出現する。

後に人口の社会的現象は一定の歯止めがかかったものの、近年においては、高齢化などにより維持が困難となることが予測される集落も出てきている。しかし、集落全体で特別栽培農産物認証事業の取組みが行なわれたり、住民登録上の人口が少ない集落でも移転先から耕地を耕しに来る姿などがみられるなど、時代に即した土地利用と集落部の景観形成をはかる時期にさしかかっているといえる。

第2節 本質的価値

大江町は山形県内陸部の村山盆地南西端に位置する。最上川が置賜盆地を通過して村山盆地へ至る間の狭隘な五百川峡谷部を流れ、村山盆地に流れ出る位置に、大江町東端の左沢の市街地が存在する。大江町は左沢で最上川に合流する支流の月布川に沿って流域に展開する集落群と、合流点付近の段丘上に形成された市街地左沢により構成される。左沢の川港は村山盆地に流れ出た最上川が、楯山の山塊にぶつかり流れが穏やかになる淵の部分に位置し、船だまりとして格好の地形が形成されている。峡谷部出口という条件から最上川舟運の物資の積替え地点、かつ川船そのものを転換する地点として重要な役割を果たした。

また大江町には、西から、月布川の源流が流れ出る朝日山地の高山帯と上・中流部丘陵部が展開している。下流部には河岸段丘が形成されている。谷口集落左沢に対して後背地である月布川流域の集落群は、山に囲まれることで風の勢いが弱く、土壌が肥えた青芋の栽培に適した環境であった。焼き畑により栽培された青芋は、最高の品質とされた「七夕芋」など「最上芋」として遠隔地へ移出され、農山村集落は取引を通じて富を獲得していた。

大江町の景観の成り立ちには、最上川舟運を通じた広域との流通・往来。そして、月布川沿いでいわば「生産地」である農山村と「商業地」である左沢との互惠関係が欠かせなかった。

大江町では月布川沿いの段丘上で縄文時代の遺跡が確認されている。左沢の市街地の開発は、最上川に臨む楯山に築かれた左沢楯山城の築城に遡る。山城は寒河江荘地頭大江氏の一族左沢氏によって正平年間築城されたといわれ、発掘調査では15世紀後半から17世紀前葉の存続期間が確認されている。元和8年、酒井直次を藩主とした左沢藩が成立し、山城が廃されて小漆川の台地上に新しい城が造られる。直次は庄内藩主酒井忠勝の弟である。外様雄藩への対策として置かれた庄内藩の元で、米沢藩上杉氏の北進路を抑える左沢に配され、小漆川城と城下町を建設した。他藩に通じる戦略的路線や要所要所に置かれた寺社など、城下町の防御を意識して、近世、権力者が計画的に段丘面を利用して形成された町の形が、現在の左沢市街地の道や地割に継承されていることが、19世紀前半に描かれた絵図との対比から確認できる。

そして、元禄年間の西村久左衛門の開削によって、酒田の河口から上流の置賜まで最上川舟運の航路が繋がった。左沢に上流米沢藩の陣屋「米沢舟屋敷」が置かれたことから、左沢は物資の積替え地点として重要な役割を担っていくこととなる。

最上川舟運の河岸や船着き場があった町や集落には、河岸や船着き場以外の町の構造を兼ね備えた河岸等のほかにも理由があって成立した町と、川に並行する通りと川に面した短冊地割による河岸に特化した町がみられるが、左沢は前者に分類することができる。すなわち城や代官所があり、政治的な拠点として武家が居住して、舟運の恩恵を受ける町人と棲み分けながら居住したという、特徴的な町の構造をみることができる。

近世左沢に暮らした人々は、最上川舟運河岸の物資集散地で商取引を行い、集まった財を背景として町の規模に比して盛大な、「囃子屋台」などが練り歩く都市型の祭礼を行い、また「波切不動」などの社寺に舟運の安全を祈願していた。現在も左沢市街地では商店街が営まれ、土蔵や店蔵が残るとともに、祭礼で使用された囃子屋台や、舟運安全が祈願された寺院をみることができる。

最上川舟運は、日本海から西廻り航路を通じて全国とつながっていた。そのため山形県内陸部の左沢においても、当地に伝わる「百目木甚句」に描かれるように、船の往来と積み荷を通して「京」「松前」「博多」といった全国とのつながりを意識させる流通・往来が形成された。

ただし、明治30年代に最上川舟運が衰退し、大正11年に鉄道の左沢駅が設置されて、左沢の流通・往来は、内陸の山形、村山地方へと流れが変わった。購買圏の変化がおきて市が衰退する一方で、左沢駅前に市街地が拡大した。

一方、本郷・七軒の農山村は、月布川下流で谷底平野の農村、中流の河岸段丘上の農村、上流の支流沿いの山村に大きく分けることができる。月布川上流から中流の丘陵部と河岸段丘上では、青芋が栽培されていた。青芋は、江戸時代には「産物第一」とされ、奈良晒や小千谷縮の原料となった。

青苧は換金性の高い商品作物で、最上川舟運によって上方などへ運ばれていった。経済的な豊かさを背景に、最上川舟運の物資集散地左沢との往来や、南北方向につながる三山信仰の往来により、「前句寄」にみられるような精神的な豊かさや、自立した生活と文化が作りだされた。

農山村における青苧の生産は、明治後期から養蚕に代わり、現在は果樹栽培が営まれている。

このように、左沢と本郷・七軒の農山村部を結び、出羽三山参詣とともに物資輸送に使われた東西の道「左沢市場道」と、農山村部を南北に伸びる出羽三山信仰の道、左沢から置賜や山形などに続く陸上交通の道、そして、最上川の水上交通路による流通・往来が大江町の景観形成に欠かせない要素であった。

そして、広域とつながる最上川舟運や左沢からの陸路、農山村の三山往来、これらと同様に重要であるのが左沢と農山村の結びつきと言える。

左沢の元醤油醸造業者を対象とした聞き取り調査では、本郷・七軒地区との取引を指して「沢に登って卸して食べさせてもらった」という言葉で語られており、農山村集落と町場の共存的経済構造が指摘されている。左沢には最上川舟運という大動脈が通っていて、舟運の積替え地点として物資の集散地であり、そこから流入した文化が農山村の営みや生活文化創出にとって欠かせないものであった。一方で、左沢における流通・往来に根差した繁栄と町場の形成においても、月布川流域で高値で取引された青苧などの商品作物を生産した農山村の存在と、農山村で生産された青苧などの取引は、なくてはならないものであった。

このように大江町の景観は、最上川舟運など広域における流通・往来のターミナル左沢と、生産地である農山村の互恵関係によって成り立ったものであり、最上川舟運の河岸や船着き場があった集落の繁栄には、舟運によって運ばれた商品の生産地の存在が欠かせなかったことを伝える文化的景観である。

